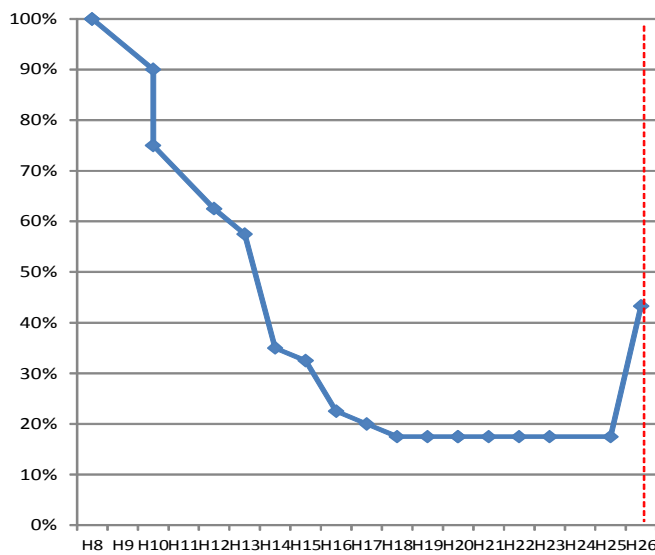


樹種名	エノキ	
科 目	ニレ科	
学 名	<i>Celtis sinensis</i> var. <i>japonica</i>	
分 布	本州、四国、九州に分布し、暖地では丘陵部から山地、寒冷地では平地まで自生する。 道路、社寺の境内、公園、山地にきわめて普通に見ることができる。 昔から一里塚によく植えられた。	
樹木特性	陽樹であり自然林では溪谷沿いの肥沃な斜面に生育するが、乾燥地・過湿地にも耐えることができる。	
用 途	建築・器具・家具・機械・薪炭材のほかケヤキの代替材として利用されることもある。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	300 本／0.10ha (3,000 本／ha)	
特 徴	【樹 形】 「榎」の漢字は、夏に道路脇の大樹が木陰を作るので、夏の木の意味の和字である。 大木になると 1 本でも林のような大きな梢（こずえ）を作る。落葉高木で向陽適潤の地を好み、樹皮は厚く灰色、または灰黒色で、小さな皮目が多く、ざらざらした感じになる。写真のように横方向に皺がより、ゾウの膚のようにも見える。葉は互生し、左右不同の広卵形または楕円形。縁の上部に鋸歯がある。葉の基部から出る 3 脈が目立つ。これがエノキの葉の特徴である。 材は建築・器具・薪炭材のほかケヤキの模擬材として利用される。また、国蝶「オオムラサキ」の餌木であることが知られている。	 
試験地での様子	普通苗木を植栽し、植栽後からコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害及び環境要因と考えられる枯死が発生し現存率が著しく低下した。 植栽から 18 年を経過した現在の平均樹高は 6.5m 程度と順調に生育している。	
被 害	植栽後に、コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。 (延べ駆除本数：7 本)	

エノキ 現存率



【現存率】

植栽後からコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害等による枯死が発生した。

平成 19 年度以降の枯死は見られない。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 43.3%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

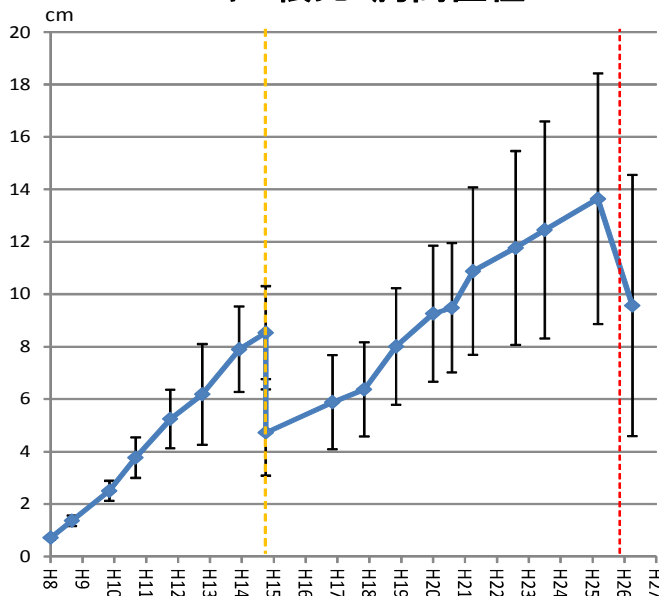
順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 9.57 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

エノキ 根元・胸高直径



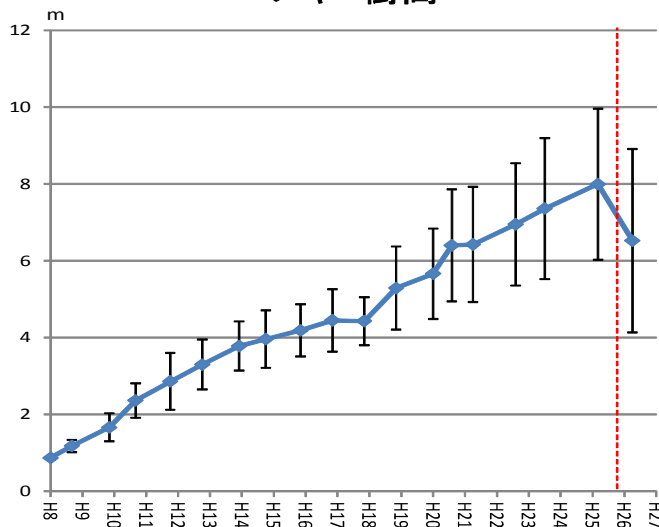
【樹 高】

順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 6.52m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

エノキ 樹高



《プチ情報》

エノキの由来については、いろいろな解釈はあるが、定説は無い。

例示すると、餌の木(小鳥が好む)、枝の木(枝が多い)、柄の木(器具の柄に使われた)、さえのかみ(道祖神)の木→「さえのき」の説等、多くある。

現在はマイタケ人工栽培の原木として利用されている。